

外項の遊離数量詞について¹

—— 眼前描写的な同時把握量 ——

石 田 尊

0. はじめに

日本語の数量詞のうち、[主名詞+格助詞 数量詞]のようなパターンとなる遊離数量詞（呼称は慣用に従う）については、主名詞（host NP）またはその痕跡との間に相互 c- 統御のような local な構造的関係が要求されることが指摘されている（Miyagawa 1989）が、一方で、Terada（1990）、北原（1997）、三原（1998）では遊離数量詞の現象に関する動詞外項と内項の非対称性に関連した言及がなされている。

共通語を想定した以下のような例においても、内項を主名詞とした遊離数量詞が安定した文法性を示すのと異なり、外項の遊離数量詞には、許容度上の問題（あるいは少なくとも、解釈上の異なり）が見受けられる。ここで“_”は「文法性判断等保留」を示すとする。

- (1) a. _ お嬢様が車を 2 台買った
 b. _ 高校生が 3 人車を買った

(1)のような遊離数量詞には、NP quantifier である場合と VP quantifier である場合とが指摘されているが（Ishii 1999 参照）、(1)a では NP quantifier に特有とされる単一事象解釈を含め、部分量解釈や、VP quantifier に特徴的とされる多回・累積的解釈も可能であり、内項の遊離数量詞では、解釈上の制限は見られないように見える。

一方外項「高校生」の遊離数量詞が現れる (1)b では、特に 3 人組の高校生が 1 台の車を買うというような、グループ読みの単一事象解釈が困難となる。部分量解釈については文脈を補えば可能であると考えられる。「この数日で」等を補えば、「高校生が車を買う」という event が 3 セット起こるという分配的解釈も当然可能である。実際には (1)b の許容度は話者により、また想定さ

れる文脈によりまちまちであろうが、いずれにしても、内項の数量詞と外項の数量詞とで、許容度上、あるいは文法性判断上の異なりがある（またはそのように見える）ということになる。

もし、内項の遊離数量詞であるか外項のそれであるかということで文法的な異なりがあるとすれば、それはその数量詞が動詞句構造または（一次）叙述の構造と関係を持つためだという可能性が考えられることになる。その場合、仮に数量詞が名詞句と緊密な構造関係を結んでいるように見えてとしても、数量詞は動詞句の構造に結びつけられた要素、さらに言えばVP修飾要素（連用修飾要素）として処理されるべきものとなるかもしれない。一方で、内項/外項での解釈や許容度上の異なりが、何か別の要因によるものであるということになれば、遊離数量詞のうちのあるものについては、主名詞とのlocalな環境のもと、その名詞句を直接量化する要素として分析できる可能性が明確に残ることになる。

本稿では、この問題を検討するため、遊離数量詞自体の解釈と、遊離数量詞を含む構文の許容度の問題を取り上げる。またこの検討を通し、内項だけでなく外項においても本稿が「眼前描写的な同時把握量」と呼ぶ解釈の遊離数量詞が現れること、およびこの数量詞が、主名詞と数量詞とにlocalな構造的関係が認められるNP quantifierであると考えられることの2点を主張する。

1. 先行研究が示す問題点

Ishii (1999)、川添 (1999) 以降、数量詞の議論にNP quantifierとVP quantifierの区別は必須だと考えられるが、両研究の分析が完全に重なっているわけではない。川添 (1999) の「後置存在量化詞」は「しか」による構成素テスト等により主名詞と構成素関係のようなlocalな関係にあるとされるものであり、その点においては、Ishii (1999) のNP quantifierと同様のものと見なすことができる。だが、(2)に示すように、部分読みや多回的事象解釈をそうした数量詞に認めるか否かに関しては、両者の見解は異なっている。

(2) Ishii (1999), 川添 (1999) の比較

	Ishii (1999)	川添 (1999)
NP quantifier	<ul style="list-style-type: none"> ・ non-distributive (single event) ・ partitive ・ distributive/cumulative (multiple event) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Eタイプ照応の可能な解釈 (「後置存在量化詞」)
VP quantifier	<ul style="list-style-type: none"> ・ distributive/cumulative 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 束縛変項解釈の可能な解釈 ・ 部分の解釈 (「副詞的量化詞」)

ただし、非分配的な単一事象解釈については、主名詞と local な構造的関係を結ぶ遊離数量詞のみに認められるという認定は両者とも共通している²。川添 (1999) の「後置存在量化詞」の例は以下 (3)a のようなものだが、非分配的な解釈であり、そのことは川添 (1999) が E タイプ照応と呼ぶ解釈の「そいつら」が出現することでも確認できる。部分読みの (3)b ではソ系列の指示詞との間に E タイプ照応は成立せず、(3)c のように束縛変更解釈 (つまりは分配的な解釈) が現れる。

(3) 川添 (1999, (38) (53) (61))

- a. 学生が3人そいつらの作った歌を歌った Eタイプ照応
- b. ?* (全部で30人いる) 3年5組の生徒が3人そいつらの作った歌を歌った ?* Eタイプ照応
- c. (全部で30人いる) 3年5組の生徒が3人そいつの作った歌を歌った 束縛変項解釈

遊離数量詞の外項/内項に関する非対称性については、北原 (1997)、三原 (1998) 等が指摘しているが、特に北原 (1997) の、先行詞のある「個体数量詞」(「2本」, 「3人」等) は内項が先行詞 (主名詞) の場合「対象量=動作量」を、外項が先行詞の場合「主体量のみ」を示すという一般化、そして三原 (1998) の、「日本語の数量詞連結がアスペクト限定の問題である (三原 1998 (下), p.109)」という指摘は重大である。北原 (1997) については、ただちに (外項の) 遊離数量詞は VP quantifier のみ、という方向での一般化に結びつくものではないと思われるが、三原 (1998) のように、数量詞の問題をアスペクト限定の問題と関連づける方向は、最終的には遊離数量詞をすべて副詞的要素と見るよ

うな立場とつながる。

なお、内項の遊離数量詞が達成量/パーフェクト量（北原 1996, 1997 参照）やアスペクト限定と親和するのは、VP quantifier に特有の分配読み/累積読みのためであると考えることが可能である。この解釈は、大まかに言えば主名詞の解釈や θ 役割に合致する実体を数え上げるような計量・量化の仕方をした場合にふさわしく、(4) の例の解釈からもうかがえるように、数え上げの終わりがアスペクト限定の終端/パーフェクト時点の数量と重なるものと考えられる。

- (4) a. 健太が営業用の車を 4 台洗った
b. 涼子がピアノを 3 台弾いた

本稿では、(1)で見られるような外項の数量詞と内項の数量詞の非対称性の問題を念頭に、外項に関して非分配的な単一事象解釈の NP quantifier が存在することの（再）確認と、そうした数量詞の解釈上の特徴を明確にすることを目標として検討を進めていく。次節ではまず、外項に関する（累積読みでも部分量の解釈でもない）単一事象・非部分量解釈の遊離数量詞の解釈上の特徴について、観察を行う。

2. 単一事象・非部分量解釈の遊離数量詞

本稿では遊離数量詞の基本的な振る舞いを明らかにするため、文脈的アスペクト限定と関わる時間副詞は可能な限り排除し、語順も基本的な語順と考えられるものを中心に例文を検討していく。“_” はここでも「文法性判断等保留」を示すとする。

- (5) a. _ 高校生が 3 人車を買った
b. _ 中学生が 3 人ポチを蹴飛ばした
c. _ 高校生が 3 人納屋を掃除した

外項の遊離数量詞に関して筆者の内省は、NP quantifier に特有とされる単一事象・非部分量解釈を許すが、しかし以下に示すように、(5)a～c の各例についての許容度は一様なものではない。

(6) 単一事象・非部分量の解釈 (NP quantifier に特有の読み) についての許容度:

- a. * 高校生が3人車を買った
- b. ?? 中学生が3人ポチを蹴飛ばした
- c. (?) 高校生が3人納屋を掃除した

同様に、非能格自動詞の文を見ておく。単一事象・非部分量解釈についての筆者の判定も併せて示す。

- (7) a. (?) 舞台上で男の子が3人踊った
- b. ? 舞台上で男の子が8人歌った
- c. (?) 女の子が3人雨の中を走った
- d. ? 女の子が9人駅まで走った

ここでは、完成相過去に例文をそろえているが、量化に関わる完成相のアスペクト的な特性として、イベントの成立のみが問題とされ、その時間的な内部構造自体は決定されない (決定できない) という特徴が指摘できる。単一実体の主語でははっきりしないが、複数実体の主語の場合、そのことは確認しやすい。

- (8) a. 健太と涼子が舞台上で踊った
- b. 健太と涼子が駅まで走った

(8) では時間幅のあるイベントが示されているが、行為者ごとのサブイベント (あまりよい呼び名ではないが便宜的に) は同時に成立している瞬間がなくともかまわない。ペアで踊ることも共に走ることも可能だが、まず一人が踊り終わり (走り終わり)、その後二人目が踊っても (走っても) よい。また、「他の人は踊らなかった」というような部分量的な文脈を想定すれば、そうした時間的な関係は実質上全く無視されることも可能である。

つまり、完成相の文という文脈では、複数実体主語の実際の関係 (同時的か先後的か) は定められず、文脈にふさわしいように解釈されるということである。

したがって、完成相の文脈に遊離数量詞付きの不定名詞主語を置いた場合、解釈が累積的（多回的）になったり部分量が現れたりすることのそもそのの基盤は、完成相が複数主体の行為等の同時性を要求しないためであると考えられる。もちろん、同時の場合があってもかまわないのであるが、この意味で、完成相の構文は、単一事象解釈でありかつ非部分量の解釈という、NP quantifier 特有とされる解釈の数量詞の可否を考えるには不要な要因の多い構文となる。

それでは、テイル文（継続相）の場合、遊離数量詞の解釈はどうなるだろうか。

- (9) a. ?? 高校生が3人車を買っている
 b. ? 中学生が3人ポチを蹴飛ばしている
 c. 高校生が3人納屋を掃除している
 d. 舞台上で男の子が3人踊っている
 e. ? 舞台上で男の子が8人歌っている
 f. 女の子が3人雨の中を走っている
 g. ? 女の子が3人駅まで走っている

テイル文の場合、外項の遊離数量詞の構文の許容度が高いことは、高見（1998（中）、注（1））や三原（1998（下）、pp.109-110）でもすでに指摘されていることだが、(9)の各例を検討して気づくことは、経験・記録のような読みではなく、眼前での動作進行の読みが得やすい例文ほど、遊離数量詞を含む文が自然だと解釈しやすいということであって、単にテイル文であれば許容度が高くなる、というようなことではない。(9)から数量詞を取り除いたものが(10)だが、眼前の動作進行の解釈の得やすさを見ると、eを除き、(9)と(10)の許容度が対応しているように見える。

- (10) 眼前の動作進行を記述するものとしての許容度：
 a. ?? 高校生が車を買っている
 b. ? 中学生がポチを蹴飛ばしている
 c. 高校生が納屋を掃除している
 d. 舞台上で男の子が踊っている
 e. 舞台上で男の子が歌っている
 f. 女の子が雨の中を走っている
 g. ? 女の子が駅まで走っている

(9)eについては、「8人」という数量詞自体に問題がある可能性が考えられる。単一事象・非部分量解釈はグループ読みとも言える解釈であり、1グループとして記述される数は、いちどきに把握されなければならない（分割して量化されるような場合はグループ読みとは見なしがたい）。川添（1999）に即して言えば、「後置存在量化詞」はイベント内での解釈とは切り離された状態で量化され、その量化された要素全体が、イベント内のある θ 役割要素と照応する（したがって「そいつら」のような要素と照応関係を構成する）。結果として、眼前描写的な状況において、相対的に数値の大きい数量詞は、NP quantifierとしての読みが得にくいものと推測される。このことは、(11)の各例の許容度でも確認できる。

(11) 眼前の状況描写の文としての許容度

- a. 舞台上で男の子が3人歌っている
- b. ? 舞台上で男の子が8人歌っている
- c. ?? 舞台上で男の子が24人歌っている

こうしたことから、単一事象・非部分量解釈の数量詞の積極的な特徴については、眼前描写的に把握可能な同時量を示すもの、と捉えることが重要であると考えられる。以上のこと、および(9)eを除く(9)の許容度から、以下のようなことが指摘できる³。

(12) 単一事象・非部分量解釈の遊離数量詞の特徴

- a. それ自体が眼前の状況の描写である
- b. 眼前描写的な文に現れた場合に、不定主語の眼前描写的な同時把握量を問題なく示せる

(12) aについては、(11)やその現象の解釈をもとにしたものであり、このタイプの数量詞が、眼前の状況の描写と捉えにくい数量は記述しがたいことを理由とした一般化である。(12) bについては、(9)eを除く(9)の許容度からの帰結である。このタイプの数量詞は、眼前描写の文の許容度について、数量詞の組み込みによって生じる解釈上のコスト以外の影響を与えておらず、許容度は文自体の眼前描写文らしさに連動している。またこれは、(6) bのように眼

前の状況ではあるが「同時量」としての把握が難しいケースについても想定した記述であり、示せるのは同時に行為する行為者の数量である。いずれにしても、(12)で重要なのは眼前描写という概念であって、アスペクト限定やテイル文の状態性の問題ではない。アスペクト的な観点からは、(11)の許容度の問題が説明できないからである。

なお、眼前描写ではなく知識内から数量に関する情報を持ってくるような数量詞の場合については、それが NP quantifier としての解釈であるのかどうかについての検討も含め、今後の課題となる。

- (13) a. これからアリーナでダンサーさんが600人踊ららしいよ
 b. ?今からこの会場で、地元の小学生が64人日頃鍛えたかると腕前を競う

この(13)は「同時量」として解釈し得るものではあるが、単一事象と言えるかどうか、あるいは、「同時把握量」と見なすべきかどうか、といった検討が必要である⁴。

3. 「眼前描写的な同時把握量」の由来

単一事象・非部分量解釈の遊離数量詞に見られる「眼前描写的な同時把握量」という解釈上の特徴は、付帯状況デ句 (depictive *de*-phrase) と共通している点がある。付帯状況デ句の許容度にはいくつかの制約が関わるが、その特徴は以下のようなものである (石田 2003 での記述に基づく)。

- (14) 付帯状況デ句に関する認知的な制約
 付帯状況デ句は、文が表す事象が起こっている間保たれる、ある実体の状態を記述するものであり、かつ事象の観察と状態の観察とが同時に可能でなければならない
- (15) 付帯状況デ句に関する文法的な制約
 付帯状況デ句は、認知的な制約 (14) に違反しない限り、以下の実体の状態を記述することができる
- a. 主語となる名詞句が指示する実体
 - b. その文で背景化されていない下位事象において中心的な実体

この二つの制約うち(14)から予測されるのは、(16)が示すように事象が起こる前と後とで変化してしまう付帯的な状態の記述はできないこと、および(17)が示すように、文が表す事象と付帯的な状態とが同時に観察可能でない状況では、付帯状況デ句の許容度に問題が生じることである。(17)bの使役主は、文が表す具体的な状況内に観察可能な状態で存在していなくても、使役的な関係さえ成立していれば文は許容されるが、このことが付帯状況デ句の持つ制約と干渉し合い、許容度に問題が生じるということである。

- (16) a. * 健太_iがサンマ_jを生_iで焼いた / 風船_jを泥だらけ_iで洗った
b. * 健太_iが裸_iでパジャマを着た / 脱いだ
- (17) a. 校長先生_iがジャージ姿_jで走った
b. ?? 校長先生_iがジャージ姿_jで生徒たちに校庭で絵を描かせた

(15)の制約から予測されるのは、(18)が示すように、能動文の場合非影響動詞（内項の変化や動きを表さない動詞）の内項を付帯状況デ句は記述できないこと、およびそうしたものも受動文で主語となれば付帯状況デ句で記述することができること等である。

- (18) a. 健太_iが裸足_jで涼子を追いかけた
b. * 健太_iが涼子_jを裸足_iで追いかけた
c. 涼子_jが裸足_jで健太に追いかけられた

Ishii (1999) ではデ句の付帯状況句ではなく「-のまま」タイプの付帯状況句と NP quantifier との対応の可能性が指摘されているが、確かに(19)を見ると、「で」のない「-のまま」の方が local な関係を構成するようである。

- (19) a. 健太_iが涼子を裸足_jで追いかけた
b. * 健太_iが涼子を裸足のまま_j追いかけた

本稿では、付帯状況句の統語的な分布や特性の問題は現状では明確にし得ないという判断から、遊離数量詞との統語的な異同の詳細は検討しないが、付帯状況デ句のための認知的な制約(14)と類似の制約の存在は指摘できる。つま

り、(20)のような制約を、「眼前描写的な同時把握量」の解釈を示す数量詞に仮定することが考えられる。(6)で見たような許容度の差は、この(14)の数量詞版(20)に運動するものであり、以下ではこうした特徴が認められる数量詞を、「付帯量」の数量詞と呼ぶことにする。

(20) 付帯量の遊離数量詞に関する認知的な制約

付帯量の遊離数量詞は、文が表す事象が起こっている間保たれる、ある実体の数量を記述するものであり、かつ事象の観察と数量の観察とが同時に可能でなければならない

完成相よりはテイル文の方が許容度が高まりやすいのは、一次叙述されるイベントの期間を短く明確にすることで、その間保たれる変動しない数量の記述であると解釈することがやりやすくなるためであり、また、「買う」のような抽象的なイベントでは付帯量解釈の遊離数量詞が現れにくいのも、イベントの観察と数量の観察が同時に可能でなければならない(片方が状況内で具体的に片方が抽象的、または直接観察できない、というようなことは許されない)ため、と考えることができる。以上のことを以下(21)(22)で確認されたい。

(21)aでは、複数主体の関わるイベントの同時性に関する縛りがないため、数量詞には累積的、あるいは分配的な解釈が出やすい。もちろん同時量の解釈も可能はずだが、テイル文のbと比較すると、累積的な解釈、つまりイベント開始当初の行為者の数と、イベント完成時の行為者の数とに変動がある解釈(「1人」から始まって最終的に「3人」になる解釈)が得やすいことが干渉するためか、実際には付帯量(眼前描写的な同時把握量)解釈の許容度は高くない。一方bのテイル文では、テイルによって保証される事象期間の短さが影響し、付帯量としての解釈が得やすい。しかし、そうした付帯量の得やすさとアスペクトの関係は直接的なものではなく、そもそも眼前描写が成立しない心内の状況の描写では関与的ではなくなり、(22)では完成相でもテイル文でも、これまで見てきたような、NP quantifierとしての解釈を持った付帯量の遊離数量詞が現れることはできない。

- (21) a. 高校生が3人子猫を追いかけた (分配的解釈が出やすい)
 b. 高校生が3人子猫を追いかけている (付帯量で読みやすい)
- (22) a. * 高校生が3人ある女性アイドルのことをかわいいと思った

- b. * 高校生が3人ある女性アイドルのことをかわいいと思っている

ところで、(23)は内項の遊離数量詞の場合だが、付帯量解釈の出現に関しては、外項の場合と共通する特徴が見いだせる。テイル文のテイルの効果により、眼前描写だと解釈しやすい場合の方が許容量が安定する。

- (23) a. ? 健太が女の子を3人追いかけた (分配的解釈が出やすい)
b. (?) 健太が女の子を3人追いかけている (付帯量で読みやすい)

念のため、内項の遊離数量詞の場合について、例を追加しておく。

- (24) 付帯量解釈の数量詞としての許容量
a. 健太が卵を3つ水につけた
b. ? 健太が卵を3つ落とした
c. ?? 健太が卵を3つ割った
d. ??? 健太が卵を3つ買った

文が眼前描写の文であることと、主語(外項)に遊離数量詞が表れることとは、主語の指示上のタイプ等に関する密接な連関が生じるが、本稿の例は無標の能動文に限定しており、他動詞内項が主語となる例を含まない。したがって内項の遊離数量詞の例については、文タイプ等の問題からは相対的に自由のはずである。しかし、数量詞を付帯量の数量詞として解釈しようとする限り、内項の場合にも許容量の低下(あるいは別タイプの数量詞としての解釈)が生じる。たとえば(24)dは、確かに「同時量」の解釈という点では付帯量と変わらない解釈も可能のはずだが、実際には眼前描写的な解釈は厳しく、物語中の描写、あるいは知識から引き出した情報による状況の描写であると解釈されることになる。

以上を整理すると以下ようになる。これは(12)にcを追加してある程度詳細化し、かつ内項の遊離数量詞についても含むものとして拡張したものである。

- (25) 付帯量(眼前描写的な同時把握量)の遊離数量詞:

- a. それ自体が眼前の状況の描写である
- b. 眼前描写的な文の場合に、不定の主名詞の付帯量を問題なく示せる
- c. 非眼前描写的な文の場合、付帯量という数量詞自体の言語的な特性から、文の許容度を低下させるか、他の解釈の数量詞として解釈される

以上の議論は、これだけでは循環的な議論だと言われてもしかたのない点がある。特に眼前描写文、あるいは眼前描写というものについての定義や判別基準が不足している。ここでは仮に以下のようなテストを示しておくが、今後の課題となる部分が多い。

- (26) a. ふっと視線を上げると、健太が卵を水につけたのが見えた
 b. ? ふっと視線を上げると、健太が卵を落としたのが見えた
 c. ?? ふっと視線を上げると、健太が卵を割ったのが見えた
 d. ??? ふっと視線を上げると、健太が卵を買ったのが見えた

話者により許容度には差が現れるだろうが、眼前の描写を強制するような文脈に文を埋め込んだ場合、ある程度その文の「眼前描写らしさ」は測れるようである。

また、話者からは確実に描写できない、第三者の内的な情報等の場合（三原 1989, 金水 1990 等参照）では、そもそも上記のテストは不要であろうが、やはり付帯量の遊離数量詞は得られない。

- (27) (発話者が直接記述できない対象)
- a. * その件で、健太は幼なじみを 3 人思い出した
 - b. * その件で、健太は今、幼なじみを 3 人思い出している
 - cf. その件で、健太はとある幼なじみを思い出した
- (28) (まだ存在しない対象)
- a. * 保育園に寄贈するため、涼子は手頃な中古ピアノを 3 台探した (が、なかなか見つからなかった)
 - b. ?? 涼子は手頃な中古ピアノを 3 台探している

こうしたことから本稿は、遊離数量詞の1カテゴリとして、(20)に従う「付帯量」の数量詞というものを立て、その特徴は(25)のようなものであることを主張する。

4. 付帯量の遊離数量詞の統語的な振る舞い

テイル文での許容度上昇も、depictiveのような二次述部との共通性も、数量詞に関して先行研究がすでに指摘してきたことではある。ただし重要なのは、分配的な解釈と非分配的な解釈とを分けた上でそうした諸現象を再検討することであり、両者の解釈を区分せず、許容度のみ、構文の成立条件のみを考えても、確実な記述にはならない。また、本稿の関心からすれば、非分配的な解釈の遊離数量詞に関する基本的な記述を蓄積することが重要である。

遊離数量詞に関する先行研究で重要な点として、解釈と数量詞の統語的な分布とが結びつけられている点も上げられる。本稿では統語的な振る舞いについて十分取り上げる余裕はないが、NP quantifierに関して先行研究が指摘する、スクランプリングに対する「弱さ」について確認し、付帯量の数量詞が名詞句とlocalな関係を要求する数量詞として振る舞うことを示しておきたい。

- (29) a. 物音がしたのでのぞいてみたら、高校生が3人納屋を掃除していた
b. *物音がしたのでのぞいてみたら、3人高校生が納屋を掃除していた
c. *物音がしたのでのぞいてみたら、高校生が納屋を3人掃除していた
- (30) a. たまたま通りかかったので見てみたら、女の子が3人雨の中を走っていた
b. *たまたま通りかかったので見てみたら、3人女の子が雨の中を走っていた
c. *たまたま通りかかったので見てみたら、女の子が雨の中を3人走っていた
- (31) a. 高校生が3人、笑いながら女の子を追いかけている
b. *3人高校生が、笑いながら女の子を追いかけている
c. *高校生が、笑いながら3人女の子を追いかけている

- (32) a. (?) 涼子が笑いながら、女の子を3人追いかけている
 b. * 涼子が笑いながら、3人女の子を追いかけている

付帯量の解釈となりやすいよう、文脈を固定しているが、筆者の内省では、各 a 以外は非文となり数量詞は付帯量として解釈できない。(33) (34) の累積または部分の読みの数量詞、(35) の先行詞のないイベント量化の数量詞とは明らかにスクランプリングに関する振る舞いが異なることから、付帯量の数量詞は、構成素関係のように主名詞と数量詞が local な関係を構成する、副詞的ではない数量詞であることが考えられる。

- (33) a. 結局昨日は顔見知りが3人車を買った (だけだった)
 b. (?) 結局昨日は3人顔見知り車が買った (だけだった)
 c. ?? 結局昨日は顔見知り車が3人買った (だけだった)
- (34) a. 涼子は雑誌記者として、政治家を3人追いかけている
 b. (?) 涼子は雑誌記者として、3人政治家を追いかけている
- (35) a. 結局健太が3回ピアノを弾いた
 b. ? 結局3回健太がピアノを弾いた
 c. 結局健太がピアノを3回弾いた

5. まとめ

日本語に主名詞と local な関係を構成する数量詞があり、その出現は内項だけに限られず外項においても同様に見られること、またその出現の可否は、そうした数量詞による記述自体が眼前描写的であるため、文が眼前描写と読みやすいか、また主名詞が眼前の実体であるか、といったことに関わることを本稿では示してきた。付帯量の数量詞の統語的な特徴については、川添 (1999, 2002) が述べるような構成素構造となっているかどうかをさらに確認すべきところではあるが、本稿では前節において、付帯量の数量詞がスクランプリングに弱いという、NP quantifier に認められる特徴を持つことを確認したのみであり、詳細は今後の課題となる。

非分配的な解釈である付帯量の数量詞が、外項にも内項にも同様に可能だという内省が、ある程度の話者に認められるのであれば、依然として、Ishii (1999) や川添 (1999) のような発想での数量詞の扱い (つまり名詞

句と local な関係に立つ、動詞句構造や一次叙述とは一応切り離された NP quantifier を、VP quantifier の数量詞とは別に認めること) が成り立つことになる。現状での記述はまだ不十分であり、特に知識量と仮に呼んできた、眼前描写ではないが部分量でも累積的解釈でもない(つまり、同時量と言えそうな)ものの扱いを考える必要はある。しかし、外項でも内項でも関わりなく、統一的なルールに従って現れる遊離数量詞(の、少なくともその一種)として、付帯量の数量詞があるということを示す、という作業は行えたと考えたい。

[参考文献]

- 石田 尊 (2003) 「日本語二格受動文の統語論的分析」未公開博士論文、筑波大学。
石田 尊 (2010a) 「外項の遊離数量詞をめぐる一外項の非分配的な量化の可能性一」第8回現代日本語文法研究会(於大東文化大学、2010年10月16日・17日)口頭発表。
石田 尊 (2010b) 「非分配的解釈の遊離数量詞について一外項の遊離数量詞の可否をめぐる検討一」第113回関東日本語談話会(於学習院女子大学、2010年12月4日)口頭発表。
川添 愛 (1999) 「日本語遊離数量詞の量化一後置存在量化詞と副詞的量化詞一」『九大言語学研究室報告』20, pp.1-28. 九州大学文学部言語学研究室。
川添 愛 (2002) 「「と」による等位接続と遊離数量詞」『言語研究』122, pp.163-180。
北原博雄 (1996) 「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」『国語学』186, pp.76-63。
北原博雄 (1997) 「連用用法の数量詞が表す数量について一非対格性の仮説からの検討一」『月刊言語』26-3, 98-103. 大修館書店。
金水 敏 (1990) 「述語の意味層と叙述の立場」『女子大文学』国文篇41, pp.26-56. 大阪女子大学人文社会学部人文学科日本語日本文学専攻。
高見健一 (1998) 「日本語の数量詞遊離について一機能論的分析」『月刊言語』(上)27-1, pp.86-95。(中)27-2, pp.86-95。(下)27-3, pp.98-107. 大修館書店。
田中秀毅 (2010) 「日本語における遊離数量詞と先行詞の意味関係について」『広島女学院大学英語英米文学研究』18, pp.1-26. 広島女学院大学文学部英米言語文化学科。
三原健一 (1989) 「「X特定性」の概念と不定名詞句」『言語研究』96, pp.43-60。
三原健一 (1998) 「数量詞連結構文と「結果」の含意」『月刊言語』(上)27-6, pp.86-95。(中)27-7, pp.94-102。(下)27-8, pp.104-113. 大修館書店。
Ishii, Yasuo (1999) "A Note on Floating Quantifiers in Japanese", In *Linguistics: In Search of the Human Mind - A Festschrift for Kazuko Inoue*, Masatake Muraki and Enoch Iwamoto (eds.), pp.236-267. Tokyo: Kaitakusha.
Miyagawa, Shigeru. (1989) *Structure and case marking in Japanese, Syntax and Semantics* 22. New York: Academic Press.

Terada, Michiko. (1990) Incorporation and argument structure in Japanese. Doctoral dissertation, University of Massachusetts.

注

- 1 本稿は、石田 (2010a, 2010b) として口頭発表した内容を元に行っている。発表に際し有益なコメントをくださった方々、および本稿査読者の方に感謝申し上げる。
- 2 主名詞と遊離数量詞の構造的な関係については、Ishii (1999)、川添 (1999) の他、川添 (2002) の議論も参照されたい。なお本稿では、4 節において非分配的な単一事象解釈の遊離数量詞の統語的な特徴について確認を行う。
- 3 以下の(12)に関する議論では、外項に関する遊離数量詞の問題に議論を限っている。
- 4 単一事象・非部分量解釈の数量詞が眼前描写文内におかれた場合には、数量詞が表す量自体の眼前描写らしさが問われる、というのが(12)の大まかな内容だとすると、(13)のように知識の記述を行う文内の単一事象・非部分量解釈の数量詞には、「知識量らしさ」というような基準が関わっている可能性もある。いずれにしても、(13)a と b とで許容度の違いが生じる理由も含め、今後十分な検討が必要である。